



Title	＜書評＞丸山孝一編著『現代タイ農民生活誌：タイ文化を支える人々の暮らし』（アジア太平洋センター研究叢書 - 2）、九州大学出版会、1996年、226頁
Author(s)	赤木, 攻
Citation	大阪外国語大学アジア太平洋論叢. 1996, 6, p. 311-314
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99731
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔書評〕

丸山孝一編著
『現代タイ農民生活誌—タイ文化を支える人々の暮らし—』
（アジア太平洋センター研究叢書—2）、
九州大学出版会、1996年、226頁

赤 木 攻*

80年代後半以降のアジア地域の変動は、周知のことである。本書は、そうした大変動を経験した一つの典型であるタイ国を対象に、（財）アジア太平洋センターにより組織された研究班（代表者、丸山孝一）が計画実施した「タイ社会における伝統的価値観とその変容に関する文化人類学的研究」（平成4～6年度）の報告書である。タイ文化の基層は農村文化の中にあるとの認識に立って、伝統と現代性を生活者としてのタイ農民の行動の中に見いだすのが目的であるとする。調査対象地は、チェンマイ県メタン郡サンマハポン村第4区（バジェ）及び同第5区（ノンロム）で、本調査は1993（平成5）年10～11月に実施されている。研究参加メンバーは、日本人研究者5名、タイ人研究者2名である。

まず、本書の構成と執筆者を紹介しておこう。

序 章 調査の目的と方法（丸山孝一）

第一章 バジェ・ノンロムの都市化過程（丸山孝一）

第二章 北タイ農村における子供および男児への役割期待とその変容（坂元一光）

第三章 北タイ農村の子供の生活とその変容（坂元一光）

第四章 タイ社会の祖先観念と輪廻・再生観念（小野澤正喜）

*赤木 攻：大阪外国語大学 地域文化学科教授、タイ地域研究。

大阪外国語大学アジア太平洋研究会会長。

AKAGI Osamu: Professor (Thai Studies), Osaka University of Foreign Studies. President of Kansai Institute of Asia-Pacific Studies (KIAPS), Osaka University of Foreign Studies.

第五章 男が象の前足で、女は象の後ろ足か？（片山隆裕）

第六章 北タイ農村女性のライフサイクルと結婚（成末繁郎）

第七章 古い価値観の新しい周辺（パタヤ・サイホウ）

第八章 現代社会における文化学習の過程（スモン・アモーンビバット）

調査村の位置はチェンマイの北40キロに過ぎないし、1960年代にすでに電気が入っているとはいえ、幹線道路の舗装が完成する1987年頃までは確かに「民俗社会」的で、その後急激な都市化の波が洗い始めているという点で、伝統と現代性を探索するには適切なフィールドであるといえよう。

第一章は、そうした村落の都市化過程を概観している。道路網の整備、自動車の普及、経済圏の拡大（農業経営）、テレビをはじめとした情報の量と質の変化、学校教育の普及などについて都市化現象を説明する。その上で、経済・社会的変動にもかかわらず、仏教を中心とした伝統的信仰体系は存続しているとし、下部構造の変動は上部構造の必然的変動をもたらすという一般的議論は成立しないと結論づけている。

確かに仏教を中心とする信仰体系は存続しているかも知れないが、それをもって伝統の存続ととらえていいのだろうか。その信仰体系そのものが新しい社会変動に対応すべく変容しているのではないだろうか。たずねてみたいところである。

子供、とりわけ男児に対する役割期待の変化を調査するのが第二章である。従来のように単なる労働力として短期的経済的見返りを期待するよりも、今日では教育＝長期的投資を重視し、将来的な有形無形での見返りを期待しているとみている。また、家名（姓）継承への役割期待がきわめて大きく、顕著な文化変容の一現象としてとらえており、以下に述べるように問題はあがあるが、興味深い。そうした変容の側面に対して、道德教育的手段として出家への期待は依然として残っていると指摘している。

ただ、家名（姓）継承者の期待が男児にあるという点は、疑問が残る。ここでの議論の主たる拠る所は、総務庁青少年対策本部とハワイ大学東西センター人口問題研究所の国際比較調査であり、今回の調査結果でないところに不満を覚える。もう少し、家、姓、家族といった概念を正確にタイ社会の文脈でとらえ、より十

分な調査の上でなければ、こうした判断はなされるべきではないだろう。また、「トゥラクーン」という同姓カテゴリーについての言及がなされているが、「東北」タイ調査のなかで見いだされたものとしているが、そうではなく、「中部」タイ調査から見いだされたものである。

子供たちの生活世界の変化を、遊び、学習、労働の面からとらえようとしたのが第三章である。ソフトボールなど西欧的スポーツが多彩に入り込む一方で、「通りゃんせ」などの伝統的遊びも存続しているとの調査結果を示している。小学校段階での英語教育、進学熱の高まりが農村にもみられはじめ、産業化がもたらす熟練労働力への需要が最低辺にも着実に及んでいることを証明している。伝統維持的な仏教教育は、学校教育の一環として夏休みに実施される「夏期出家研修」という新しい展開の中で受け継がれており、重視されているという。かつて農作業は子供たちの労働（手伝い）の中心であったが、現在ではめっきり減少し、それに代わって農業機械が導入されているとの指摘である。近い将来、タイの子供たちも受験勉強に駆り立てられる時代が到来するのを予測させる。

第四章は、この村落の調査に直接もとづくものではなく、タイ人の精神世界は、功德や輪廻転生を内容とする仏教＝「長いサイクルの再生」観念と治療や儀礼に見られる祖霊観念や精霊崇拝に特徴的な「短いサイクルの再生」観念に分けられると主張する。そして、その二つのせめぎあいに地方差があるという。

十三歳から八十四歳までの男女二十四名にライフヒストリーを語らせ、家族と結婚、手伝いと分業、男／女であることの認識などジェンダーのありようを追跡したのが、第五章である。結論としては、工業化、都市化、家族計画の普及による少子化などの外見上の顕著な変化の割には、柔軟を特徴とする基本的なジェンダー認識は変わっていないとする。社会変動や価値体系の揺らぎによりどのように変化するかは、もう少し時間を要するという。

女性のライフサイクルにより伝統的価値の変容を考察するのが第六章である。考察に際して、三つの年齢集団に分ける方法をとっているが、単なる分類ではない。教育制度の変遷が生活に大きく影響している点を深く考慮し、1993年現在で「七十九歳から四十四歳」、「四十三歳から二十八歳」、「二十七歳以下という集団に分類し、学歴、初婚年齢、子供数、結婚後の居住形態、職業などについて調査

している点が、評価できる。

そして、学歴の伸長が下位年齢集団では著しく、初婚年齢も高くなっているとの調査結果である。ただ、両者の間には明確な関係は見られない。子供数の減少も、初婚年齢の上昇の結果ではなく、政府の人口抑制政策にある。また、農業従事者の減少の要因も、学歴の伸長ではなく、農工間の収入格差であると結論する。ただ、そうした変化の反面、婚姻儀礼などの結婚に関する伝統は依然として根強く存続しているという。

本書は、このように、北タイの伝統的要素が濃くかつ都市化現象が波及しつつある一農村を調査し、「伝統」と「現代」の今日の同居の諸相を明らかにしている点で、評価されねばならない。なぜならば、本調査へのタイ側参加者の一人であるバタヤ氏が第7章で述べているように「時と場所を異にした生活をよく知らない外部の観察者が伝統的価値観の変容または持続の理由を十分に理解することは容易でない」からである。いずれにせよ、タイ現代農村の変動に関心を持つ者は、本書を一読しなければならないであろう。

最後に敢えて少々苦言を呈するならば、各章において明らかにされている諸相を貫く特徴の考察に少しは触れて欲しかった。また、文章表現やタイ語表記の上で若干のまずさがあることも付言しておく。

苦勞の多い調査を実施され立派な報告書にまとめられた編著者、執筆者の方々の勞を多とすると同時に、九州にあって国際的な研究交流などに独自色を発揮しておられる本研究の後援者である（財）アジア太平洋センターに喝采を送る。